2014年度事業報告書

公 益 財 団 法 人　東 洋 文 庫

2014年度　公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人　東　洋　文　庫
理事長　槇　原　　稔

2014 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業報告の概要は下記の通りです。

事　業　項　目

Ⅰ　調査研究 2
Ⅱ　資料収集・整理 10
Ⅲ　研究資料出版 11
Ⅳ　普及活動 12
Ⅴ　学術情報提供 17
Ⅵ　地域研究プログラム 23

Ⅰ．調査研究

A. 超域アジア研究

超域アジア研究部門

(1)総合アジア圏域研究班

「総合アジア圏域研究」

基本的な研究方法は、年度ごとに重点地域を定め、それをアジア規模の視野から多角的に検討するとともに、周縁諸地域との地域連関や相互影響関係を検討する。範囲は、基礎資料研究、現地研究、主題研究などに跨り、多分野にわたる国際的な比較研究を行う。また、資料、検討過程並びに研究成果は、欧文にてオンラインにより発信する。このような総合的アジア研究は、アジア諸地域における資料収集と地域研究の蓄積を持ち、内外の研究連携を進めてきた東洋文庫においてのみ可能であると考える。

東洋文庫のすべての研究班の参加によって行われる重点研究としてこの「総合アジア圏域研究」があるが、基本的な検討項目は、各年度において選択した 1 つの地域のアジア圏域間における位置と役割、地域間移民ネットワーク、ディアスポラ、トランスナショナル問題を検討する。ワークショップを開催して議論を重ね、現地調査・資料調査によって現代の諸問題を歴史的背景を含め提示する。これらの討論過程を、ワーキングペーパーや電子ジャーナルにおいて発信し、さらに議論を広げていくことを目指す。

［研究実施概要］

a) 昨年に引き続き、東洋文庫所蔵の貴重書を用いた講習会「アジア資料学研究シリーズ」を開始した。今年度は、「西洋古典籍書誌講習会 －西洋書籍と東洋研究Ⅱ－」として 2 日間、「東洋の CodicologyⅢ －文理融合型東洋写本・版本学（講習会）－」として 2 日間、のセミナーを開催した。内外の書誌学研究者、研究資料館からの応募があり、このうち先着で 52 名の参加を得た。

b) 現代中国研究班、現代イスラーム研究班がコーディネーターとなり、中国圏域とイスラーム圏域の相互影響をめるぐ総合アジア圏域研究シンポジウム “Islamic and Chinese Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Supra-Regional Spheres of Islamic and Chinese Regions” (The Third International Symposium of Inter-Asia Research Networks) を開催した。シンポジウムは 2 日間行われ、のべ 93 名の参加者を得て、活発な討論が行われた。

c) 若手研究者の国際的な研究成果発信を支援するため、昨年に引き続き、国立シンガポール大学出版のポール・クラトスカ氏を招き、セミナー“Scholarly Publishing in English: What Editors Expect”を開催した。東洋文庫に籍を置く若手研究員および日本学術振興会特別研究員が参加し、クラトスカ氏より英文研究論文の作成について指導をうけた。

(2)現代中国研究班

「現代中国の総合的研究（2）」

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制（資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成）を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央研究院や中国社会科学院、ハーバード・エンチン研究所との学術交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。

［研究実施概要］

a) 資料グループは、2011 年度に刊行した和文論叢『モリソンパンフレットの世界』をもとに、引き続き東洋文庫が所蔵する近代中国関係資料の中心をなすモリソンパンフレットを整理し、系統的な調査・研究を着実に進めた。

b) 政治グループは、政治・経済・行政・社会・法律各分野の専門家で陳情に関心を持つ中堅・若手研究者をメンバーとする「綜合研究－陳情」研究会を継続した。
c) 経済グループは、南京大学に保管されていた、戦前の中国農村調査の基礎データ（ロッシング・バック資料）を修理・収集し、広く利用可能なデータとして東洋文庫に収蔵する作業を継続した。さらに「歴史的視野から見た現代中国経済」研究の第 2 部として、毛沢東時代の「社会主義経済」にかんする再検討を行うため研究会を継続した。
d) 国際関係・文化グループは、前年度に続き、全体的な研究テーマ「戦後中国の国際関係と社会・文化変容」の下、3 ヶ月に 1 回程度の研究会を開催した。

（3）現代イスラーム研究班

「現代イスラームの超域的基礎研究
－議会主義の展開と立憲体制に関する一次資料の収集と比較分析研究－」

世界の近現代イスラーム研究において、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書（アラビア語、ペルシア語、トルコ語）を収集・整理・分析し、それぞれの地域（国家）に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。2009 年度からは、新たに中央アジア諸国を比較の対象に加え、基本資料の収集と整理・分析を行う。これによって中東・中央アジアなどのイスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を一次資料にもとづいて総合的に考察する。他方、イスラーム関係資料の収集と整理、データベース化を推進し、日本における資料センターとしての充実をはかる。

［研究実施概要］

現代イスラーム研究班の活動は、資料の性格に対応してアラブ、イラン、トルコ、中央アジアの4グループに分かれて実行される。アラブ、イラン、トルコグループの研究は、第 1 期（2003 年-2008 年）の実績を踏まえて、以下のように実施された。

a) アラブグループ：2013 年度にひき続き *A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt*（東洋文庫、2007）を利用して、議会文書の解読・分析を進めた。
b) イラングループ：議会文書の分析を進め、イラン議会図書館との研究協力協定の一環として、Ali Tatari 氏のペルシア語書籍 *Financial-Administrative System and Institutionalization of the First National Assembly of Iran* を刊行した。
c) トルコグループ：：『トルコにおける議会制の展開』（東洋文庫、2007）および『全訳　イラン・エジプト・トルコ議会内規』（東洋文庫、2014）の研究成果を踏まえつつ、引き続きトルコの憲法と議会に関する資料文献の収集と分析を進め、研究会を開催した。
d) 中央アジアグループ：昨年度までに引き続き関係資料の収集と整理を行った。
e) 4グループの合同研究会（7 月 26 日、於：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）を開催し、宇山智彦「旧ソ連地域における主権国家体制の揺らぎ：『脅威』の虚実、『ナショナリズム』『地域統合』の両義性」、今井宏平「機能不全化するトルコの地域安定化政策：『アラブの変革』とウクライナへの対応を事例として」の報告を得た。

B. アジア諸地域研究

1. 東アジア研究部門

（1）前近代中国研究班

①「古代地域史研究－『水経注』の分析から－（2）」

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』（原典 6 世紀、中国最古の地理書）とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的な方法による研究に挑んでいる。また流域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討することで、歴史的自然環境・社会的実態を具体的に理解し、流域の地域社会の構造の変化を明らかにしていく。刊行を予定している『水経注疏

訳注』洛水・伊水篇訳注もこれらの成果を反映させたい。渭水下流域及び洛水・伊水流域は「黄河文明」の中心地である。ここを「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究の新たな展開となる研究を目指している。

［研究実施概要］

a） 陳橋驛復校『水経注疏』（江蘇古籍出版社刊）をテキストとし、洛水・伊水篇（巻 15）の講読を隔週の研究会において実施し、完了した。

b） 上記の研究会での成果と2013年12月に行った洛水・伊水流域の実地調査による成果等をふまえて、東洋文庫中国古代地域史研究グループ編『水経注疏訳注　洛水・伊水篇』（東洋文庫論叢 78）を刊行した。

②「中国社会経済史用語解集成の作成とその電子辞典化」

本グループがこれまでに作成・公刊した『宋史食貨志訳註（一）～（六）』（東洋文庫刊、1960 年～2006 年）、および『宋会要輯稿・食貨篇・社会経済用語集成』（東洋文庫刊・2008 年）における訳註および用語の収集の成果をベースとして、整理と増補を加え、広範囲かつ多方面の利用者の便宜に適合するような冊子体および CD-ROM の用語解説集を作成し、研究活動のいっそうの発展に資するプロジェクトである。

［研究実施概要］

a） 『宋会要輯稿・食貨篇・社会経済用語集成』（東洋文庫、2008）に収載する約 8 万の用語を、検索の便宜に向けて、A.財政、B.経済、C.社会、D.公用語の 4 範疇（同中・小区分）に従って再整理・再編集し、デジタル化して公開した。

b） 『中国社会経済史用語解』（東洋文庫、2011）を増補拡充するため、司法・商業の用語の解読・語釈を実施し、宋明刊「清明集」戸婚門、道釈門、明刊「万用正宗」律令門、商旅門の訓読と用語の採集を行った。

c） 次年度に『唐宋編年史料語彙索引』（約 6 万語彙原稿カードによる）を電子媒体で編集して公開するための準備作業を行った。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究（3）」

本研究班では、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行い、その研究成果として 2004 年度に『東アジアの都城と渤海』、2006 年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。2011 年には上京龍泉府、2012 年には上京龍泉府、虹鱒漁場墓地遺跡、三霊屯遺跡等の中国所在の渤海遺跡を踏査、資料収集を行った。現在、中国では上京龍泉府、西古城、八連城など都城及び古城跡の調査が進行し、それら遺跡の報告書も刊行され、渤海遺跡に関する資料が増大した。そのため、これら遺跡資料の机上における整理と調査・研究が重要となっており、現地における調査とともに継続していくことが今後の活動の中心となる。

［研究実施概要］

引き続き中国吉林省所在の八連城、西古城、黒竜江省上京龍泉府など渤海の都城に関する遺跡を調査した。これらの遺跡については中国によるかなりの量の発掘報告書が刊行されたため、それらの報告結果の精査を行い、これまでの研究成果と合わせて再検討を行った。また、近年、中国の渤海墓地遺跡の調査報告書も多数刊行されており、各地域における渤海墓の特徴を出土遺物の研究と合わせて検討する予定である。

④「前近代中国民事法令の変遷」

宋代以降の戸婚・田土・銭穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近 20 年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすくなったことにもよろう。本研究班も過去 5 年間、この方向で研究活動をしてきた。この 5 年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてることが必要であることに

到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析するに適していると見ているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆくが、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると考える。

［研究実施概要］

a） 2013 年度に引き続き、宋～清の条例の収集を進めた。

b） 収集した条例の整理、解読と並行して定期的に研究会を開催し、メンバーが各自分担研究する研究報告を数度実施した。

c） 内外の研究者と意見交換の場としての拡大研究会として、本年度は中国厦門大学の鄭振満教授を招き、講演と学術交流を実施した。

（2）近代中国研究班

「20 世紀前半日本の中国調査」

本研究は、1910 年代から 40 年代前半に日本の諸研究調査機関が中国で実施した調査活動に関する資料収集とその分析を行うもので、その重点は華北におくが、地域的特質を検討するために華中南を含め、日本側および中国側の資料の活用について新たな視点から再整理をはかり、20 世紀前半期の中国社会の全体像を考察する。2012 年度に引き続き、「華北」認識の問題を中心テーマとする。

［研究実施概要］

a） 華中・華南を中心として、日本及び中国における資料調査・収集を引き続きおこなった。

b） 定例的研究会を開催し、山本真「華南福建の社会構造から読み解く革命と戦時総動員　－在地武装勢力に着目して－」、本庄比佐子「台湾から華南を見る　－資料の一つ『台湾時報』－」、高田幸男「江南プロジェクトの現状　－科研第 2 期第 1 回調査へ向けて－」の各報告を得た。

c）『近代中国研究彙報』第 37 号を刊行した。

（3）東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究（2）」

当班では 2004 年度以来、京都大学附属図書館や天理大学附属天理図書館今西文庫をはじめ、日本国内の各機関・個人が所蔵する近世朝鮮の記録類の調査を進めてきた。本課題はそれをさらに継続し、第 2 次調査をおこなうことにより、解題目録の完成を期すことをめざす。すでに近世朝鮮の古典籍類（いわゆる「朝鮮本」）については総合的な調査が進められ、その全貌がある程度解明されているが、これに対し地方官庁や民間で作成され、「成冊」などと呼ばれる帳簿類など各種の記録類については、これまで全体的な調査がなされることがほとんどなかった。2004 年度からの第 1 次調査では、もはや現地では所在が確認されていない資料を発見し、その内容分析をおこなうなどの成果もあげており、第 1 次調査と今回の第 2 次調査によって、日本における当該資料類の悉皆的な調査をほぼ達成できるものと見込まれる。

［研究実施概要］

a）『日本所在近世朝鮮記録類解題Ⅱ』刊行の準備作業を進めた。

b） 調査済み資料について書誌データの整理と分析を進め、また韓国所在の資料類との対照作業を通じて近世朝鮮の各種記録類の性格を検討した。

c） 未調査資料のリストを作成し、予備的調査を行った。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究（2）」

清代の第一公用語である満洲語は、清初ばかりでなく、清朝一代にわたって用いられた言語である。18 世紀の乾隆帝代より、京師に暮らす旗人たちは、日常語として漢語をもちいるようになっていったが、文章用語としての満洲語は、民国にいたるまで継続して利用された。現在、北京・中国第一歴史檔案館には、約1千万件の文書資料が保存されているが、そのかなりの部分は、満洲語（または漢語とのいわゆる合璧）によって記されたものである。このことは、清代の文書伝達体系全体において、満洲語の利用が不可欠であったことを示している。とくに入関前（1644 年以前）および清初の時期の文書・書籍、ならびに旗人、藩部をはじめとする

辺境地方、そして対外関係等の文書において、多くの場合満洲語が用いられている。本研究は、これら満洲語で記された、または場合によっては印刷された清代の文献資料について、清初期を中心として総合的に検討を加えようとするものである。

［研究実施概要］

清初の「内国史院」関係文献と『鑲紅旗満州衙門檔案』の研究を実施する。2012 年度に出版した「天聰五年檔Ⅱ」にひき続き、崇徳年間分の檔案研究を継続した。また、『鑲紅旗檔』研究編（TBRL *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko*）の編集作業を継続した。また、本研究グループが長年にわたって実施した調査によって得られた清史関連文献の整理・研究を併せておこなった。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析（2）」

中国ではこの数年にみられる内外政治・経済・民族を中心とする国家事業が急進するなか、長期間に亙って内在していた政治・経済・民族・文化問題が表面化している。チベットやウイグルをめぐる自治区の問題はその端的な事例であり、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んでいる。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題も現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。新たに用いられ始めている「中華民族」の呼称はその顕著な例として捉えうる。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。刊行予定の英文論文集にこれまでの成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と対外関係を分析する上で不可欠な檔案（公文書）類のうち、保存収蔵状況が未詳な檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、デジタル化し、向後の研究に貢献することを目的とする。

［研究実施概要］

a） 欧文論叢（TBRL）『清代諸領域の歴史的構造分析』第 1 巻・清朝初期政治史研究（1）ならびに同『清代諸領域の歴史的構造分析』第 2 巻・『壇廟祭祀節次』の刊行を準備した。

b） 前年度に引き続き、清朝政治史、清代中国社会経済史、清代中国近代政治史、清代モンゴル・露清関係史、清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて海外における図書館・檔案館・研究機関などに所蔵されている檔案文献史料類の史料調査・現地調査を実施し、旧来のマイクロ=フィルム方式や新たなデジタル化方式による蒐集・整理・分析作業を行うと共に、中国で新たに影印されている大部の檔案文献史料類の蒐集することを進めた。

c） 上記の文献史料類について、目録作成を進めると共に、デジタル化によって幅広い利用ができるようにした。またこれらの新規蒐集史料と東洋文庫収蔵の文献資料とを活用し、上記の課題に関する研究を推進し、その研究成果を個別論文・論文集・史料集などの形で公開することを目指した。欧文論叢（TBRL）として準備した『清代諸領域の歴史的構造分析』第 2 巻・『壇廟祭祀節次』はその一環であり、東洋文庫所蔵の『壇廟祭祀節次』（漢文・満洲文）を取り上げ、広く中国の国家祭祀研究への大きな貢献をめざしたものである。

（4）日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究（2）」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。2006 年度までに室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題（I～V）を公刊したことを受けて、ひき続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

［研究実施概要］

2015 年度刊行予定の『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅷ』に向けて、岩崎文庫所蔵資料について書

誌調査を行い、研究会を催し、執筆作業を進めた。また、その資料群の全体像の把握に努めた。

2．内陸アジア研究部門

（1）中央アジア研究班

①「サンクトペテルブルグ所蔵古文献の研究－ウイグル文を中心として－」

東洋文庫が入手したサンクトペテルブルグの東洋学研究所のマイクロフィルムのうち、ウイグル語とソグド語については『東洋文庫所蔵 St.Petersburg ウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録［第 1 稿］』として、初期の現地での実見データの一部を取り込んだフィルム番号整理一覧を、2002 年に刊行した。その後、マイクロフィルムのデータを昨年までのプロジェクトでデジタル整理を続けた。ほぼ完成に至った目録の改訂版を原稿とし、冊子かデジタルデータの形で編集し直して刊行することは、内外研究者の要望に沿うことになる。ただし、東洋文庫と東洋学研究所の初期の契約の制約があるため、その刊行方法については慎重に検討をおこなうものとしたい。ついては、ウェブ上に未公開のものを含む大英図書館蔵のウイグル文字文献の一覧表などと合わせて刊行する可能性も検討したい。その中から、文書研究の成果についての論文をこれに付すこととする。

［研究実施概要］

a） 目録改訂版の増補をベースとして文献研究を進め、各メンバーが個別成果として発表した。

b） 古ウイグル文を中心とする古文献の研究文献一覧を増補し、下記c、dの成果に反映させた。

c） 漢文との合璧文献を中心として、2-（1）-③「漢語文献」グループとの協同研究をすすめた。

d） データベース「IOM 所蔵ウイグル文書目録 －東洋文庫蔵マイクロフィルムより－」を作成して東洋文庫のサーバに搭載し、当面内部での利用ができるようにした。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと政治権力」

ソ連解体（1991 年）以後、中央ユーラシア近現代史研究は、大きく可能性が開かれた。これまでアクセスが不可能であった多種多様な史料が公開され、また現地の研究者との共同研究や外国人研究者による現地調査も可能になったことは、決定的な意味をもっている。こうした中で、本研究は次の 2 点を課題とする。

第一に、8 世紀以降の中央アジア史を考えるとき、その政治と社会、文化においてイスラームが果たした役割を無視することはできないが、ソ連時代は無神論イデオロギーのためにイスラームに関わる諸問題は不当に軽視されてきた。いま新たな中央アジア史を再構成しようとするならば、この点を克服することが不可欠である。

第二に、ペレストロイカ以降、中央ユーラシア地域においてはイスラームの復興が顕著であり、イスラーム国家の樹立を目標とする急進派は、世俗主義を掲げる政権との間に鋭い緊張関係を作り出している。このような現代のイスラーム復興主義は、中央ユーラシア史の文脈においてどのように考えるべきだろうか。それには、近現代史におけるイスラームと政治権力との相互関係を実証的に検討することが不可欠である。

［研究実施概要］

研究計画に基づいて実施した。

③「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文献マイクロフィルム目録のデータベース化」

2002 年に東洋文庫が世界にさきがけて入手した東洋学研究所の内陸アジア出土文書マイクロフィルム（全 363 リール、約 25 万齣）には、4、5 世紀から 15 世紀に及ぶコータン・サカ語、西夏語、チベット語、ウイグル・ソグド語、漢語、チャガタイ・トルコ語、サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語、満洲語、モンゴル語の 11 言語の文書が含まれている。このフィルム資料の目録をデータベース化してそれを公開することは、わが国だけでなく、諸外国の研究機関・研究者の希求するところ切なるものがある。

本研究は、上記フィルムの中からとくに漢語文献を抽出してそのフィルム目録のデータ化を図るとともに内陸アジア出土漢語文献の特性を明らかにすることを目的とする。

［研究実施概要］

a） 敦煌出土文献 Reels256～363 のうち、漢語文献のある 40 リール（266～277、279～286、292、334～337、349～363）についてリールに付された各文献整理番号とその齣数とを対照させた仮目録を作成し、文庫の閲覧に供するべく各文書に付された文献番号の「索引」作りを進めた。

b） 上記文献中、『俄蔵敦煌文献』（上海古籍出版社、1993）で未収録とされる漢語文献約 700 件について、前年度に引き続き内容を検討した。その中の 20 件については録文を作成し出典を確定することができた。

c） サンクトペテルブルク所蔵ウイグル・ソグド文字文献全31リールのうち、21リールに含まれる漢語文献約 1,100 件余りについて、文献番号とその microfilm 齣数とを対照した「仮目録」を作成するとともに、できる限りその録文と出典を示した目録の作成に着手し、その結果、非仏典漢語文献の集約については一定の目途を立てることができた。

d） 本研究班における研究成果として、『敦煌・吐魯番出土漢語文献の様式・特性の研究』（仮）を刊行するために、前年度に引き続き定期的に「内陸アジア出土古文献研究会」・「8-11 世紀内陸アジア出土漢語文書輪読会」を開催し、編集作業を進めた。

（2）チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌的研究（2）」

チベット研究班においては、新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかることを目的とする。収集した資料については目録化を行い、データベースとして公開すると同時に、敦煌チベット語文献、河口慧海将来文献などとともに東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献として写本校訂と訳注研究を行い、データベースあるいはシリーズ刊行物として公開する。以上の 3 点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指すものである。

［研究実施概要］

a） 資料収集：近年中国で出版されたチベット美術関連の図書を収集した。チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を購入し、コレクションの体系的な充実をはかった。

b） a）によって収集した資料の整理を行った。

c） チベット人研究協力者の協力のもとに、次の研究を行った。

① 筆記体写本の校訂：古いチベット語写本の多くは手書きの筆記体で書かれており、一般研究者には解読が難しいものがある。それらをチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキストデータベースを作成した。

② ①のデータベースをもとに文献の分析・研究を行った。

d）『西蔵仏教宗義研究　第 11 巻』、*Studies in Tibetan Buddhist Texts* vol. 2 の刊行準備を行った。

3．インド・東南アジア研究部門

（1）インド研究班

「インド刻文史料の蒐集と研究」

インド（南アジア）の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者しかいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究においての根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。

他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云いうる。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。

そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものをも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

［研究実施概要］

a） 実際の出来事を記録する刻文と、年代を経て語り継がれる口頭伝承の関係は重要で、2015年2月、Brenda Beck トロント大学教授と Y. Subbarayalu 元タミル大学教授を招いてセミナーを行い、中世タミル地方の口頭伝承と刻文の関係を検討した。

b） 2014年3月に東南アジア研究班と合同で行った、南アジア・東南アジア前近代における国家形成と社会統合についての国際シンポジウム報告書（TBRL）の作成を行い、原稿を完成させた。

c） インド研究班が 2009～2014 年度に行ったインド刻文研究についての報告書 *Report on Indian Epigraphical Studies* の作成にかかり、その原稿をほぼ完成させた。

（2）東南アジア研究班

「近現代東南アジアに関する史料研究」

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第二次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この 40 年間に飛躍的な研究の発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目を浴びてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な資料となりうる。本研究は、従来力点が置かれた日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果した日本人の役割の視点からその記述を検討し、日本人をはじめ中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した近代東南アジア社会の特質について研究する。

［研究実施概要］

a） 近代東南アジアの都市の社会統合に果たす日本人の役割に関する文献資料の整理を行い、関係文献目録のデータベース作成について検討した。

b） カンボジアをはじめとする東南アジアの主要都市を訪れ、外来系住民の居住空間の歴史的展開について調査した。

c） 研究会を開催し、日本人をはじめ外来系住民を交えた近代東南アジアの都市の社会統合について議論し、併せて成果の出版について検討した。

4．西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究（2）」

ワクフ（宗教的寄進）は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。ワクフに関わる、法学書、年代記、地理書などの叙述史料とワクフ寄進文書や調査台帳などの文書史料を収集し、諸地域における実態と歴史的変容を解明する。

［研究実施概要］

a） 第 1 期からの継続課題であるヴェラム文書（モロッコの契約文書、東洋文庫所蔵）について、アラビア語文書校訂および英文解説のための研究会を月例で開催するとともに、関連資料の収集や調査を行った。

b） ワクフ文書の総合的研究にむけ、フランス CNRS 国際共同研究（GDRI）と連携し、アルジェリアでのワークショップ（6 月）に参加するとともに、第 4 回中東研究世界大会（WOCMES、アンカラ、8 月）において、ヨーロッパとイスラーム世界の寄進を比較するパネルを組織した。

c） 第 2 期の成果として、TBRL15 *The Vellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries :Part I* を、編纂・刊行した。モロッコやオランダの研究者の協力を得て、本研究における国際的な研究の端緒となるものと位置づけられる。『イマーム・レザー廟ワクフ文書集』（TBRL、ペルシア語）の校訂と研究を進めた。

C. 資料研究

資料研究部門

東アジア資料研究班

「東アジア資料の研究」

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

［研究実施概要］

a） 中央研究院歴史語言研究所の漢籍全文資料庫授権使用協定により、洋書（旅行記）10,000 頁をデジタル撮影して提供した。

b） 中国人民大学、副教授呉真博士を約 1か月間、招聘し、東アジア比較演劇史の共同研究を実施した。

c） 中国祭祀演劇関係写真データベースの開発・公開・補充を行った。このデータベースの月間アクセス数は、400,000 件に達し単独項目としては、東洋文庫の蔵書資料検索項目の中で最高値を示すに至っている。

D. 各種研究会・講演会開催

数量／月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
研究会数	7	4	7	8	2	6	5	4	8
参加人数	55	44	78	149	24	101	63	60	197

1 月	2 月	3 月	計
4	5	11	71
41	107	235	1,154

Ⅱ. 資料収集・整理

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究、資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は別添資料の通りである。

区　分	和漢書	洋　書	その他
総合アジア圏域研究	0 冊	0 冊	0 件
超域・現代中国研究	259 冊	8 冊	0 件
超域・現代イスラーム研究	6 冊	547 冊	0 件
東アジア研究	316 冊	14 冊	0 件
内陸アジア研究	18 冊	58 冊	11 件
インド・東南アジア研究	0 冊	50 冊	0 件
西アジア研究	0 冊	338 冊	0 件
共通（継続・大型資料）	1,016 冊	22 冊	0 件
合　計	1,615 冊	1,235 冊	11 件

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区　分	受　贈				寄　贈		
	和漢書	洋　書	その他	計	和漢書	洋　書	計
単行本	1,555 冊	336 冊	56 冊	1,947 冊	167 冊	595 冊	762 冊
定期刊行物	1,465 冊	397 冊	—	1,862 冊	4,499 冊	855 冊	5,354 冊
計	3,020 冊	733 冊	56 冊	3,809 冊	4,666 冊	1,450 冊	6,116 冊

C. 資料保存整理

2014 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日までの期間における、保存整理作業は、下記の通りである。

・マイクロフィルム劣化防止作業　1,281 件

Ⅲ. 研究資料出版

A. 定期出版物刊行

1.『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)　第 96 巻第 1～4 号　A5 判　4 冊(刊行済)

2.『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)
No.72　B5 判　1 冊(刊行済)

3.『近代中国研究彙報』　第 37 号　A5 判　1 冊(刊行済)

4.『東洋文庫書報』　第 46 号　A5 判　1 冊(刊行済)

5. *Modern Asian Studies Review*(新たなアジア研究に向けて)
Vol.6　A4 判　1 冊(刊行済)

6. *Asian Research Trends New Series*　No.9　A5 判　1 冊(刊行済)

B. 論叢等出版

1.『水経注疏訳注　洛水／伊水』東洋文庫論叢 78　A5 判　1冊(刊行済)

2. 2014 年度国際シンポジウム要旨集　A4 判　1 冊(刊行済)

3. TBRL15 *The Vellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries: Part I*
B5 判　1冊(刊行済)

4. *Financial-Administrative System and Institutionalization of the First National Assembly of Iran*
A5 判　1 冊(刊行済)

5. IOM 所蔵ウイグル文書目録　－東洋文庫蔵マイクロフィルムより－　DB　(館内公開済)

Ⅳ. 普及活動

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座

（前　期）

『華北の発見』

第 541 回　6 月 30 日（月）

「朝鮮在住日本人の華北認識　－総合雑誌『朝鮮及満洲』掲載記事を事例として－」

東洋文庫研究員
日本大学教授　　松重　充浩　氏

第 542 回　7 月 7 日（月）

「華北地域概念の形成と日本」

東洋文庫研究員
信州大学教授　　久保　亨　氏

『中国近世の規範と秩序』

第 543 回　7 月 15 日（火）

「光棍例の成立とその背景　－清初における秩序形成の一過程－」

東洋文庫研究員
慶應義塾大学教授　　山本　英史　氏

第 544 回　7 月 24 日（木）

「明末江南の商業化と宗族規範」

東洋文庫研究員
（台湾）国立暨南国際大学教授　　濵島　敦俊　氏

（後　期）　共通テーマ「アジアの古地図を読む」

第 545 回　12 月 1 日（月）

「中国古地図の世界　－『地図文化史上の広輿図』－」

鳥取大学講師　　要木　佳美　氏

第 546 回　12 月 3 日（水）

「山形細谷（細矢）家伝来「大明地理之図」－江戸時代の東アジア大絵図－」

東洋文庫研究員
東北学院大学名誉教授　　細谷　良夫　氏
東洋文庫研究員
東北学院大学准教授　　小沼　孝博　氏

第 547 回　12 月 4 日（木）

「地理的認識の交流　－古地図から－」

京都大学名誉教授　　応地　利明　氏

2. 特別講演会

9 月 26 日（金）

「中国民間歴史文献の収集と整理」〔中国語・通訳あり〕

厦門大学歴史系教授　鄭 振滿 氏

11 月 29 日（土）

「中国近代史研究と日中関係」　中山大学哲学系教授　袁 偉時 氏

「歴史認識と日中関係」　Seton Hall University 准教授　汪 静 氏

〔中国語・通訳あり〕

12 月 12 日（金）

「中国中古の仏教王権観」〔中国語・解説あり〕

復旦大学文史研究院副教授　孫 英剛 氏

2 月 20 日（金）

“Is this just one more folk legend?”〔英語・通訳なし〕

Professor, Department of Anthropology, The University of Toronto　BECK, Brenda 氏

3 月 7 日（土）

「毛沢東時代の経済制度と政策の評価」北京大学国家発展研究院教授　周 其仁 氏

北京大学国家発展研究院教授　姚 洋 氏

〔中国語・通訳なし〕

3 月 20 日（金）

「中国中世における地獄の審判と俗世の法律」〔中国語・解説あり〕

国立台湾師範大学歴史学系教授　陳 登武 氏

3. 東洋文庫談話会

9 月 10 日（水）

「戦後中国「留用」帰国者に関する資料　－東洋文庫所蔵「中共事情」を中心に－」

東洋文庫外来研究員

下関市立大学教授　飯塚 靖 氏

10 月 20 日（月）

「17-18 世紀のチベット仏教僧ネットワークと清朝

－アムド（東北チベット）の諸寺院との関わりを中心に－」

日本学術振興会特別研究員（PD）　池尻 陽子 氏

3 月 9 日（月）

「宋代文書から読み解く中国怪異譚」

東洋文庫奨励研究員　小林 隆道 氏

「南宋中期における史彌遠政権の成立とその変質」

日本学術振興会特別研究員（PD）　小林 晃 氏

4. 公開講座

〈トルコ　－日本・トルコ国交樹立 90 周年－〉

5 月 24 日（土）

「オスマン帝国という国家」

東京大学東洋文化研究所名誉教授　鈴木 董 氏

5 月 31 日（土）
「オスマン文化の形成と変容」
東京大学東洋文化研究所名誉教授　鈴木　董　氏
6 月 28 日（土）
「オスマン帝国における伝統演劇と西洋演劇の受容」
東洋文庫研究員・元明治大学教授　永田　雄三　氏
7 月 13 日（日）
「100 年の恩～日本・トルコ友好史」
作家　秋月　達郎　氏
8 月 9 日（土）
ワークショップ「トルコのタイル文様を描いてみよう！」
トルコ細密画の会　青木　節子　氏
新井　久美乃　氏
宮本　千鶴　氏
8 月 10 日（日）
ワークショップ「トルコ刺繍「オヤ」を使ったアクセサリー作りに挑戦！」
オヤ講師　小島　優子　氏
ワークショップ「トルコ式書道で名前を書いてみよう！」
日本アラビア書道協会・事務局長　山岡　幸一　氏
演奏会「トルコの民族楽器サズの演奏」
サズ演奏家　大平　清　氏

9 月 21 日（日）・10 月 4 日（土）
アジア資料学研究シリーズ
「西洋古典籍書誌講習会－西洋書籍と東洋研究Ⅱ－」
東洋文庫研究部長　濱下　武志　氏
シンガポール国立大学教授　BORSCHBERG, Peter　氏
東洋文庫主幹研究員　牧野　元紀　氏
東京大学史料編纂所教授　松井　洋子　氏
龍谷大学名誉教授　江南　和幸　氏

10 月 31 日（金）・11 月 1 日（土）
アジア資料学研究シリーズ
「東洋の Codicology Ⅲ－文理融合型東洋写本・版本学（講習会）－」
東洋文庫研究員・東京大学准教授　杉山　清彦　氏
東洋文庫研究員・東京外国語大学 AA 研教授　中見　立夫　氏
東洋文庫研究員・日本大学副学長　加藤　直人　氏
東洋文庫研究員・北海道大学名誉教授　石塚　晴通　氏
東洋文庫研究員・和光大学教授　深沢　眞二　氏
慶應義塾大学教授　石川　透　氏

〈岩崎コレクション　－孔子から浮世絵まで－〉
9 月 27 日（土）
「岩崎彌太郎が見た幕末長崎と海外」
長崎歴史文化博物館研究員　岡本　健一郎　氏
11 月 24 日（月）
「浮世絵の話：東洋文庫コレクションを中心に」
大和文華館館長
あべのハルカス美術館館長　浅野　秀剛　氏

11 月 30 日（日）
「日本の漢籍受容と古写本」
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授
髙橋 智 氏

12 月 7 日（日）
「東洋文庫コレクションにみる浮世絵としての春画」
立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員
石上 阿希 氏

2 月 28 日（土）・3 月 1 日（日） ≪総合アジア圏域研究国際シンポジウム≫（使用言語：英語）
Islamic and Chinese Studies and Inter-Asia Research Networks:
Integrated Study of Dynamism in the Supra-Regional Spheres of Islamic and Chinese Regions
Opening Address:
HAMASHITA Takeshi (Research Department Head, Toyo Bunko)
Session 1: Some Aspects of Chinese Muslim Society: Focusing on Migration, Network, and Gender
Speaker:
WANG Jianxin (Professor, Cultural Anthropology, Ethnology Institute of Lanzhou University; Vice Director, Center for Studies of Ethnic Minorities in Northwest China of Lanzhou University)
“Sermon Poems in Uyghurs and Huis: A Comparison Approach toward the Socio-Religious Representations of Muslim Minorities in China”
Maria JASCHOK (Director, International Gender Studies Centre; Research Fellow, Lady Margaret Hall, University of Oxford)
“Soundscape of a Women’s Mosque and Potency of Silence: Evocations of Islamic Faith, Ruptured Memory and Precarious Presence in Kaifeng, China”
MATSUMOTO Masumi (Professor, Muroran Institute of Techology)
“Islamic Education for Women in China: Vocational or Ethical Schooling?”
Commentator:
OKA Natsuko (Research Fellow, Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization)
Session 2: Parliamentarism and Constitutional Systems in Islamic and Chinese Regional Spheres
Speaker:
Mohsen KHALILI (Associate Professor of Political Science, Faculty of Economics and Administrative Sciences, Ferdowsi University of Mashhad)
“Two Dimensions of the Iran’s Constitutionalism: Familiar Notions, Lack of Theory”
SASAKI Shin (Assistant Professor, Faculty of Humanities, Seikei University)
“After the ‘Second Empire’: New Horizons of Ottoman Constitutional History”
SUZUKI Emi (Research Fellow, Toyo Bunko; Fellow, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies)
“Notable Politics and Parliament in Modern and Contemporary Egypt”
AJIOKA Toru (Professor, Faculty of Liberal Arts, University of the Sacred Heart)
“Constitutional Government and the Local Administration System of Republican China”
Commentator:
Hamid AHMADI (Professor of Political Science, Faculty of Law and Political Science, University of Tehran)
Session 3: Local and Global Problems around Islamic and Chinese Regional Spheres
Speaker:
MA Qiang (Professor, Institute for Western Frontier Region of China, Shaanxi Normal University)
“Middleman: The Integrated Function of Hui among Ethnic Groups in Yining City of Xinjiang”

KOH Keng We (Assistant Professor, Nanyang Technological University)
"Islam and the Chinese in Southeast Asia: A Historical Overview"
XIANG Biao (Lecturer in Social Anthropology, University of Oxford)
"Economic Globalization, Population Mobility, and Islam in China: The Case of Yiwu"
Commentator:
HAMASHITA Takeshi
General Discussion
Closomg address:
HAMASHITA Takeshi

〈もっと知りたい！イスラーム〉
3 月 15 日（日）
「遠くて近いイスラーム世界」
東洋文庫研究員
お茶の水女子大学教授　三浦　徹　氏
「サイバー・イスラーム：インターネットがつなぐ日本と中東」
日本エネルギー経済研究所研究理事　保坂　修司　氏

5．普及展示企画
東洋文庫ミュージアムにおける展示企画について、展示テーマ、展示品の検討を重ねた。

6．参考情報提供
『東洋文庫年報』2013 年度版　A5 判　1 冊（刊行済）

B．データベース公開

2014 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ（日本語・英語）に対するオンライン検索アクセス状況については、別添資料の通りである。

C．海外交流

以前より研究協力協定を締結しているフランス極東学院、台湾中央研究院、ハーバード・エンチン図書館、ハーバード・エンチン財団、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館にくわえ、ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）図書館と協力関係を結んだ。

また、2 月 28 日（土）・3 月 1 日（日）に≪総合アジア圏域研究国際シンポジウム≫として、"Islamic and Chinese Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Supra-Regional Spheres of Islamic and Chinese Regions" (The Third International Symposium of Inter-Asia Research Networks) を開催した。

Ⅴ. 学術情報提供

A. 図書・資料の閲覧（協力）サービス

数量／月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	計
閲覧者人数	193 人	203 人	225 人	206 人	269 人	195 人	212 人	239 人	211 人	164 人	179 人	200 人	2,496 人
閲覧図書数	2,397 冊	1,864 冊	2,099 冊	2,105 冊	3,153 冊	2,160 冊	1,818 冊	3,403 冊	3,012 冊	3,123 冊	2,416 冊	2,786 冊	30,336 冊
レファレンス数	52 件	55 件	61 件	56 件	72 件	53 件	57 件	64 件	57 件	44 件	48 件	54 件	673 件

B. 研究資料複写サービス

	申し込み件数	焼付枚数
マイクロフィルム・紙焼写真	125 件	
電子複写	1,039 件	35,074 件

C. 研究情報提供サービス

刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 展示

一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし（中学生程度の歴史知識を前提）、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期した。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

常設展と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

a) 常設展は国宝と浮世絵を中心に構成されており、保存と集客の観点から、毎月初めに展示資料の入れ替えを行った。

b) 企画展は一年に 3 回の頻度で行っている。本年度は以下の企画展を実施した。

①「仏教　－アジアをつなぐダイナミズム－」(2014 年 1 月 11 日～4 月 13 日)

②「トルコ　－日本・トルコ国交樹立 90 周年－」(2014 年 4 月 23 日～8 月 10 日)

③「岩崎コレクション　－孔子から浮世絵まで－」(2014 年 8 月 20 日～12 月 26 日)

④「もっと知りたい！イスラーム」(2015 年 1 月 10 日～4 月 12 日)

c) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なものわかりやすいものに仕上げた。A5 版でハンディなブックレットタイプである。

d) 上記企画展会期中に公開講座(企画展示記念講座)を開催した。

Ⅳ.普及活動－4.公開講座 を参照

e) 六義園特別展示「六義園をめぐる歴史」を開催した。

会期:①2014 年 3 月 19 日～4 月 7 日　②2014 年 11 月 19 日～12 月 7 日

会場:東洋文庫ミュージアム 1 階オリエントホール

f) 小岩井農場での出張展示「時空をこえる本の旅:東洋文庫の世界」を行った。

会期:2014 年 11 月～2015 年 5 月

会場:小岩井農場資料館

5. ガイドツアー

ミュージアムへの来客サービス・集客戦略の一環として、館内ガイドツアーを実施し、好評を得た(開館期間は毎日 15 時に開催している)。

6. 学校連携

a) 東京藝術大学との協力協定により、記念コンサートを何度かミュージアム内にて開催し、多数の来場者を得た。

b) 成蹊大学図書館との協力協定により、東洋文庫の貴重書を大学図書館入口にて常設展示した。

c) 小岩井農場での「時空をこえる本の旅:東洋文庫の世界」展に関連し、岩手県雫石町立七ツ森小学校 6 学年校外学習にて学芸員がレクチャーを実施した(12 月 16 日)。

7. 博物館連携

静嘉堂文庫との連携展示として、下記の美術品の借用展示を行った。

『青花六果文瓶』 明代(15 世紀初期)景徳鎮官窯　一口

『色絵冠形香炉』(古清水)　江戸時代(17～18 世紀)　一合

『色絵鳥兜香炉』(古清水)　江戸時代(17～18 世紀)　一合

『三彩獅子』(白、茶)　唐代(8 世紀)　二躯

8. 入場者数

2014 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日における、ミュージアム総入場者数は以下のとおりである。

月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
入場者数	1,908 人	1,637 人	1,398 人	1,856 人	1,730 人	2,325 人	2,478 人

11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	計
3,529 人	4,060 人	1,419 人	2,398 人	3,257 人	27,995 人

E. 広報普及

東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 要人の訪問

a) 行幸啓:天皇皇后両陛下が東洋文庫ミュージアムを来訪、観覧された(4 月 9 日)。

b) キャロライン・ケネディー駐日米国大使、福田赳夫元首相、他。

2. 関連書籍の刊行

東洋文庫創立 90 周年記念事業の一環として、下記の書籍を刊行した。

東洋文庫善本叢書　全 12 巻(勉誠出版刊)

『記録された記憶　－東洋文庫の書物からひもとく世界の歴史－』(山川出版社刊)

『アジア学の宝庫、東洋文庫　－東洋学の史料と研究－』(勉誠出版刊)

3. 報道実績

ミュージアムに関しての報道実績の主なものを以下に挙げる(50 音順)。

新　聞: 全国紙『朝日新聞』、『読売新聞』、『日本経済新聞』、『毎日新聞』など

雑　誌: 『マンスリー三菱』、『東京人』など

テレビ: テレビ東京『アンサー』(2015 年 2 月 16 日放送)にて「もっと知りたい！イスラーム」展が紹介された。

ラジオ: J-WAVE『LOHAS TALK』(2015 年 2 月 9 日～2 月 13 日)に牧野元紀主幹研究員が出演し、東洋文庫の諸活動について紹介した。

4.『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして発行・頒布した。

5. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信している。

6. 近隣の中学・高校とのミュージアム・フリーパス連携

a) 小石川中等教育学校とのミュージアム・フリーパス連携を引き続き締結し、同校の新入生 160 名を招待した課外授業を実施した(4 月 25 日)。

b) 神田女学園中学・高等学校　地理歴史部のスクールプログラムに基づき顧問、部員に展示案内他学芸員がレクチャーを実施した(12 月 10 日)。

7. 東洋文庫アカデミア

東洋文庫研究員をはじめとする各分野の専門家が講師となり、所蔵資料やこれまでの研究成果などの専門知識をわかりやすく教授する市民むけ講座を下記のとおり実施した。

講座名	講師（所属）	期間	人数
ペルシア語の世界	渡部良子（東京大学非常勤講師）	4/11-7/4	8
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子（トルコ細密画専門家）	4/14-6/23	3
ドリュール	中村美奈子（Les fragments de M）	7/5-7/19	4
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子	7/14-9/22	3
霊と神と人	平勢隆郎（東洋文庫研究員・東京大学東洋文化研究所教授）	7/14-8/18	7
第一次世界大戦と日本	加藤博章（国立公文書館アジア歴史資料センター調査員）	7/25-9/5	4
東洋文庫バックヤードツアー	會谷佳光（東洋文庫）・岡崎礼奈（東洋文庫）	8/26	13
初歩の文人画講座	伊藤忠綱（二松学舎大学非常勤講師）	9/3-11/19	8
イランの芸術ペルシア書道に親しむ	角田ひさ子（拓殖大学語学研究所講師）	9/6-11/15	3
ペルシア語の世界（中級編）	渡部良子	9/12-12/19	6
ペルシア語の世界（初級編）	渡部良子	9/24-12/10	4
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子	10/13-12/22	4
現代中国理解セミナー	毛里和子（東洋文庫研究員・早稲田大学名誉教授）・山田辰雄（慶応義塾大学名誉教授）・姫田光義（中央大学名誉教授）・中兼和津次（東洋文庫研究員・東京大学名誉教授）・阿古智子（東京大学准教授）・菱田雅晴（法政大学教授）	10/16-11/18	23
ことばの塾講習会 「マルコポーロと東方見聞録」	牧野元紀（東洋文庫）	10/19	13
同「中国古代の文字とことば」	内山直樹（千葉大学准教授）	12/14	18
同「中国古代の文字とことば」	内山直樹	1/25	15
同「江戸時代の仏教」	會谷佳光	3/14	9
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子	1/12-3/23	3
初歩の文人画講座 2	伊藤忠綱	1/14-3/18	6
江戸の書物 1	清水信子（二松学舎大学非常勤講師）	1/15-1/29	3
イランの芸術ペルシア書道に親しむ	角田ひさ子	1/17-4/4	4
バックヤードツアー	會谷佳光・牧野元紀	1/21	7
江戸の書物 2	清水信子	2/12-3/19	2
東洋文庫コレクションで浮世絵に親しむ	岡崎礼奈	2/18	6
孟嘗君と函谷関	平勢隆郎	3/2-3/16	5
建築・絵画にみるインド・イスラームの歴史	小名康之（東洋文庫研究員・青山学院大学名誉教授）	3/20-4/24	6

F. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1)外来研究員の受入

彌永　信美（フランス国立極東学院東京支部長）
「日本仏教」
（2014 年 4 月 1 日～2014 年 12 月 31 日）

宋　好　彬（高麗大学校民族文化研究院研究員）
「朝鮮本古典籍の調査」
（2014 年 4 月 1 日～2014 年 9 月 30 日、高麗大学校）　［受入担当 ： 藤本幸夫］

飯塚　靖（下関市立大学教授）
「「満洲国」期の重化学工業基盤の構築とその戦後中国への影響」
（2014 年 4 月 1 日～2014 年 9 月 30 日、下関市立大学）　［受入担当 ： 久保亨］

蘇　基　朗（香港科技大学人文科学部長）
「中国近代化の為の実業・法律・教育」
（2014 年 5 月～2014 年 8 月）　［受入担当 ： 斯波義信］

蘇　寿富美（George Mason 大学副教授）
「中国近代化の為の実業・法律・教育」
（2014 年 5 月～2014 年 8 月）　［受入担当 ： 斯波義信］

姚　小　鴎（中国伝媒大学文学院教授）
「中国古代文学」
（2014 年 7 月 20 日～2014 年 8 月 20 日）　［受入担当 ： 田仲一成］

オリヴィエ・テシエ（フランス国立極東学院ハノイ支部准教授）
「20 世紀初頭のベトナム大衆文化」
（2014 年 8 月 14 日～2014 年 8 月 21 日、極東学院）　［受入担当 ： 極東学院］

康　保　成（中山大学中文系教授）
「中国古代戯曲演劇史」
（2014 年 8 月 25 日～2014 年 11 月 24 日）　［受入担当 ： 田仲一成］

ダヴァン・ディディエ（フランス国立極東学院東京支部長）
「中世における臨済宗」
（2015 年 1 月 1 日～2015 年 12 月 31 日［延長］）

呉　　真（中国人民大学副教授）
「中国古代戯曲演劇史」
（2015 年 1 月 24 日～2015 年 2 月 28 日）　［受入担当 ： 田仲一成］

(2)2014 年度日本学術振興会特別研究員 PD・RPD の受入

池尻　陽子（筑波大学大学院 PD）
「チベット仏教僧の思想とネットワークが清代内陸アジア史に与えた影響に関する研究」
（2010 年度採用、11・12（中断）・14 年度・3 ヵ年間）　［受入指導者・吉水千鶴子］
※2014 年 10 月 31 日をもって身分を終了

小林　晃（北海道大学大学院 PD）
「12～15 世紀中国における華北・江南の政治的統合過程」
（2012 年度採用、13・14 年度・3 ヵ年間）　［受入指導者・山本英史］

五味　知子（慶應義塾大学大学院 PD）
「17～19 世紀中国基層社会における規範とジェンダー」
（2013 年度採用、14・15 年度・3 ヵ年間）　［受入指導者・岸本美緒］

阿部　由美子（東京大学大学院 PD）
「旗人から満洲族へ－20 世紀中国理解への新たな視座」
（2014 年度採用、15・16 年度・3 ヵ年間）　［受入指導者・松重充浩］

河野　正（東京大学大学院 PD）
「1950～1960 年代、多地域比較による華北農村社会の変容に関する研究」
（2014 年度採用、15・16 年度・3 ヵ年間）　［受入指導者・内山雅生］

西村　陽子（東洋文庫研究員）
「地図史料批判によるシルクロード探検隊資料の統合と遺跡データベースの作成」
（2014 年度採用、15・16 年度・3 ヵ年間）　［受入指導者・斯波義信］
※就職につき、2014 年度をもって身分を辞退。

濱本　真実（東洋文庫研究員）
「近代ユーラシア陸上貿易におけるタタール商人の活動とその文化的影響」
（2014 年度採用、15・16 年度・3 ヵ年間、RPD）　［受入指導者・小松久男］

（3）2014 年度東洋文庫奨励研究員の受入
小林　隆道（2014 年度採用、就職につき終了）

2. 外国人研究者への便宜供与

China	栄新江［北京大学教授］（ほか 9 名）
Mongol	CHULUUN, S.［Director, Institute of History, Mongolian Academy of Science］（ほか 5 名）
Iran	AHMADI, Hamid［Professor, University of Tehran］（ほか 2 名）
Singapore	BORSCHBERG, Peter［Professor, National University of Singapore］
India	SUBBARAYALU, Yellava［Retired Professor, Tamil University］
USA	ZHOU Gang［Associate Professor, Louisiana State University］
Egypt	FAWZY, George［President, Leila Books］
France	NEYESTANI, Mohammadreza [Post Doctor Research Fellow, CNRS]
Pakistan	AQEEL, Moinuddin［Professor, University of Karachi］
Canada	BECK, Brenda［Professor, University of Toronto］
Italia	VITA, Silvio［Director, Italian School of East Asian Studies］
Vatican	PROVERBIO, Delio V.［Curator of Oriental Manuscripts, Vatican Library］
Taiwan	海中雄［蒙蔵委員会処長］

Ⅵ. 地域研究プログラム

A. イスラーム地域研究資料室

「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進と史資料学の開拓」

本研究では、イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築する。史料群を地域社会全体を表す縮図と捉え、これを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラーム地域の重層的な像を解明することを目的とする。

［研究実施概要］

a) 現地の出版状況や、現地及び海外の研究動向を踏まえ、現地語資料および欧文研究書等の収集と整理を行った。我が国のイスラーム地域研究の成果を国内外により開かれたものにするため、「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」のデータの更新および科研費（研究成果公開促進費）との連携による国際版の作成・公開を行った。また、アラビア文字資料司書連絡会を開催し、機関の枠を超えたアラビア文字資料の収集と利用に関する情報共有を行った。通算 4 回目となる「卒論を書くための情報検索リテラシーセミナー」では、大量の情報から効率的に必要な情報を検索するための方法を学生に直接レクチャーし、検索スキルの面でも向上を図った。同セミナーは新たに現代パレスチナ地域研究を専門とする錦田愛子（早稲田拠点構成員）による、フィールドでの資料収集についてのレクチャーを加え、より広く専門の学生に対応することができた。資料の整理に関しては、大学図書館等における現地語資料の整理に有益な、アラビア文字とラテン外字の入力補助パネルを拠点ホームページ上に公開した。

b) 史料研究では、昨年度に引き続きオスマン民法典の翻訳を目的とした「シャリーアと近代」研究会を計 5 回行うと共に、共著『イスラーム法の「変容」』（山川出版社、イスラームを知るシリーズ）を刊行した。NIHU 連携研究で作成したオスマン民法典研究関係文献データベースを nDP （nihu Data Provider）上で公開すると共に、基本文献1点の全頁画像をウェッブサイト上に公開し、オスマン民法典研究の研究環境の整備を行った。特定史料の研究成果として、東洋文庫研究部西アジア研究班との連携により東洋文庫所蔵ヴェラム（皮紙）契約文書のアラビア語テキスト校訂と研究（TBRL15 *The Vellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries: Part I*）を刊行した。第 3 回オスマン史研究会のほか、共催により近代中央ユーラシア比較法制度史研究会、「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開」研究会、第 13 回中央アジア古文書セミナー、第 7 回オスマン文書セミナーを開催し、トルコ、エジプト、イラン、中央アジアの幅広い分野で史資料を扱う若手研究者や学生の育成を行った。国際連携の面では、科研費（基盤研究）「ワクフ（イスラーム寄進制度）の国際共同比較研究」との連携により、第 4 回中東研究世界大会（アンカラ）でのセッションの開催や東京でのワークショップ開催（2 月）などの活動を行った。

B. 現代中国研究資料室

「日本における現代中国資料の情報・研究センターの構築：
資料の長期的系統的分析による現代中国変容の解明」

中国研究に関するウェブやデータベースに関する情報を交換し、研究者の知見を広めるために、国内外の研究者・実務家を招いての国際シンポジウム及び小規模なワークショップを開催する。また東洋文庫所蔵及び新規収集の一次資料に基づいた共同研究会を継続して開催し、資料の読解能力を高め、若手研究者の養成をはかる（年数回）。また、データベースや文献資料以外に、現代史研究に必要な資料の史料学的研究を進めるセミナーなどを開催する。

［研究実施概要］

a) 資料利用環境の整備および国内外諸機関との連携については、国立情報学研究所との連携により NACSIS-CAT への書誌登録を継続して行った。本年度中に約 6,000 タイトルの東洋

文庫近代中国研究委員会（現・近代中国研究班）収集資料および現代中国資料が登録され、登録タイトル数は 56,000 件あまりとなった。

b）電子図書館についても、引き続き拡充に努めた。画像をインターネットで完全公開している資料は 516 タイトル、公開画像数は 41,000 画像あまりに増加した。また目次から検索できるシステムの整備など、利用環境の向上を継続した。

c）資料研究活動については、5 つの研究班のもとで活発に行った。研究班体制の 3 年目として、過去 2 年間の実績をもとに、他機関・他大学との共催も含めて計 17 回の研究会・シンポジウムが開催された（江南地域社会班 6 回、図画像資料班 1 回、ジェンダー資料班 5 回、政治史資料班 3 回、1950 年代史料班 2 回）。

d）海外交流面では、中国第二歴史檔案館副館長馬振犢氏ら 5 名を招聘し資料デジタル化にかかわるワークショップを催した。また江南地域社会班により 20 世紀中国江南における指導者・中堅層の人材養成に関する海外調査、海外研究機関との間でデータベース相互利用に関する協定の締結等を行った。

e）活動の成果として、近代中国の知識人が残した手書き日記の一部を活字化し注釈をつけた「王清穆『農隠廬日記』（4）」を『近代中国研究彙報』に公表した。また戦前期に出版された写真帳をもとに「『亜細亜大観』データベース」を作成し公開した。さらに、各研究班の活動をもとに、英文著作の翻訳出版、基本史料の解題出版、大学における講座の開催、データベースの拡充などの形態で成果を公表する準備を行い、2015 年度中にその一部が公刊される。東洋文庫研究部現代中国研究班との協同で行っている所蔵資料「汪政権駐日大使館文書」についても目録作成事業を継続し、来年度の出版に目処をつけた。

2014年 度 公 益 財 団 法 人 東 洋 文 庫 特 別 事 業 報 告 書

公益財団法人　東　洋　文　庫
理事長　槇　原　　稔

2014 年 4 月 1 日から 2015 年 3 月 31 日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業報告の概要は下記の通りです。

事　業　内　容

特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費（データベース等）の対象事業
「東洋学電子図書館情報システム」
［東洋文庫電算化委員会委員長：斯波義信］

「日本における中東・イスラーム研究文献目録データベース 1868-2015」
［研究代表者：三浦　徹］

「八世紀末期～十一世紀初期　燉煌氏族人名集成」
［研究代表者：土肥義和］

2. 基盤研究等の対象事業
(1)「「モノ」の世界から見た中世イスラームの女性～ガラス器と陶器を中心に～」
［研究代表者：真道洋子］
（基盤研究（B）、2011 年度採用、4 ヶ年間・最終年度）

(2)「江戸時代知識人の清朝史研究と近代日本における東洋史学」
［研究代表者：楠木賢道］
（基盤研究（B）、2011 年度採用、4 ヶ年間・最終年度）

(3)「ワクフ（イスラーム寄進制度）の国際共同比較研究」
［研究代表者：三浦　徹］
（基盤研究（B）、2013 年度採用、5 ヶ年間・第 2 年度）

(4)「ジャウィ史料の利用によるマレー民族の形成過程の研究」
［研究代表者：坪井祐司］
（若手研究（B）、2012 年度採用、4 ヶ年間・第 3 年度）

(5)「宋金元代中国における石刻「文書」の歴史的展開」
［研究代表者：小林隆道］
（若手研究（B）、2014 年度採用、3 ヶ年間・初年度）

B. 三菱財団補助金による事業

「東洋文庫アーカイブスの構築に関する調査研究」

［研究代表者：牧野元紀］

（2012 年度採用、3 ヶ年間・最終年度）

以　上